

20. 各領域の活動

<家族看護学領域>

1) 社会貢献活動について

(1) ケア検討会

家族看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、患者・家族へのケアの質の向上を図ることを目的としてケア検討会を開催している。今年度は1回の開催であった。

【日時】令和元年12月12日(木) 18:30~20:30

【場所】高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C313

【参加者】24名、教員5名

壮年期のがん患者が緩和ケアへ移行する中で、子どもたちにどのようなタイミングで病気について話をするのか、夫婦がお互いの思いを理解できないまま苦悩する家族について検討した。

夫婦にはそれぞれの立場での思いがあり、意向にズレが生じていると考えられ、各々への情緒的支援を行いながら、互いの気持ちを共有しわかり合えるように患者と妻と看護師の3人で面談することや、必要時には代弁を行い、すれ違う思いを調整する必要性が挙げられた。子どもたちに父親の病状を伝えることに関する夫婦の意思決定への支援においては、“父親として、自身のタイミングで、自身の言葉で伝えたい”という患者の意思を尊重しつつ、夫婦として足並みを揃えて取り組めるように支えることの重要性が見出された。

(2) リカレント教育

家族看護学領域では、大学院修了生への継続的なサポート体制の強化を目指し、毎月第3金曜日にWebミーティングツールを活用したリカレント教育を開始した。本年度は6回開催し、事例を通して家族支援専門看護師としての支援のあり方を検討した。

① 第1回 リカレント教育

【日時】令和元年5月17日(金) 18:30~21:00

【場所】高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C313

【参加者】修了生6名、教員5名

【テーマ】術後合併症を十分に説明されないまま手術の準備が進められた高齢がん患者家族の倫理的な課題への支援

② 第2回 リカレント教育

【日時】令和元年6月21日(金) 18:30~21:20

【場所】高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C313

【参加者】修了生2名、教員5名、大学院生1名

【テーマ】患者の意思が尊重されず家族の希望で病状説明を受けていない患者家族への支援

③ 第3回 リカレント教育

【日時】令和元年7月19日(金) 18:30~21:30

【場所】高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C411

【参加者】修了生5名、教員6名

【テーマ】透析導入に関する患者家族の代理意思決定への支援

④ 第4回 リカレント教育

【日 時】 令和元年10月18日(金) 18:30~21:20

【場 所】 高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C411

【参加者】 修了生5名、教員4名

【テーマ】 がん患者の一時退院をめぐる患者家族の合意形成への支援

⑤ 第5回リカレント教育

【日 時】 令和元年12月20日(金)18:30~21:00

【場 所】 高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C411

【参加者】 修了生2名 教員3名

【テーマ】 複数の家族員が病気を持っている家族への退院支援

⑥ 第6回リカレント教育

【日 時】 令和2年2月17日(月)18:30~21:00

【場 所】 高知県立大学池キャンパス 看護学部棟 C411

【参加者】 修了生4名 教員5名

【テーマ】 患児の検査を拒否した家族への支援

各回、修了生が実践の中で関わった事例について、遠方の修了生は Web ミーティングツールを使って参加し、ディスカッションを行った。それぞれの事例について、家族アセスメントから家族像の形成、それらをふまえたケア実践を振り返り検討する中で、参加者各々の思考過程の中に家族看護エンパワーメントモデルが活かされ、個人—家族—地域社会や医療チームといったダイナミズムの中で俯瞰的に家族を捉え、ケアを実践していることがわかった。参加者の中には、すでに家族支援専門看護師として活動を行っている修了生もおり、プレ CNS の修了生にとっては非常に学びの多い時間となった。また、Web ミーティングツールの活用は、遠方からも負担なく参加でき、有用であったので、今後も継続していきたい。

(3) 交流会（修了生の会）

【日 時】 令和元年9月14日(土) 19:00~22:00

【場 所】 京都府京都市内

【参加者】 19名

第26回日本家族看護学会学術集会が京都テルサで開催された。今回の学術集会では、「災害後における家族レジリエンスを促す看護支援モデル—メンタルヘルス版—を活用してみよう」「『家族看護エンパワーメントガイドライン』の臨床活用—家族と地域をつなぐ入院から退院期にある家族を支える看護」の2つの交流集会の企画運営をしたほか、修士課程修了生と教員が4題の演題発表を行った。学術集会に合わせ、家族看護学領域修了生と教員を対象とした交流会を開催した。美味しい京野菜の創作料理を堪能し、近況や今後の家族看護について語り合い、参加者同士の交流を深めることができた。

(4) その他

家族看護学領域では、令和元年度に家族支援 CNS コース2名の大学院修了生を輩出した。

<精神看護学領域>

1. 看護相談室（ケア検討会）

令和元年度は、3回の看護相談室を開催した。本年度も、高知県在職の精神看護専門看護師有志の会である「高知精神看護専門看護師の会」と協働し、専門看護師の実践能力の質の向上を目的としたケア検討会を実施した。

1) 第1回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ① 開催日時：令和元年6月20日(木) 19:00～21:00
- ② 場所：高知県立大学看護学部棟 C313
- ③ 参加人数：9名（本学大学院生2名、本学大学院修了生2名、教員5名）
- ④ 内容：過去や将来への不安や強い劣等感があり、他者と安定した関係を保てないケースへの関わりを報告していただいた。CNSは今のことに集中できるような関わりや、興味があることへの共感や受容を行ってきたが、今後はCNS以外の他者や集団との関わりが必要になるのではないかと考えていた。意見交換では、患者が興味を持っていることから作業療法などにつなげ、他者・集団への関わりを促進することや、患者にとって辛い出来事などは話せなくてもその思いに寄り添い続けるなど、患者と関係を継続しながら、次のステップに進めるような方法について話し合われた。

2) 第2回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ① 開催日時：令和元年9月19日(木) 19:00～21:00
- ② 場所：高知県立大学看護学部棟 C313
- ③ 参加人数：8名（本学大学院生2名、本学大学院修了生1名、他大学大学院修了生1名、教員4名）
- ④ 内容：神経難病などを併発し、支援者や別居家族への攻撃と、生活上の強いこだわりを持つケースへの関わりを報告していただいた。検討では、怒りや攻撃、こだわりの行動に注目するだけでなく、それらの背景を、精神面・身体面・生活面などから多角的にアセスメントすることの重要性が話し合われた。また、複数の機関が関わっており、困難感に差が生じていたため、それぞれの機関の得意分野を活かしていくこと、利用者が怒りを向けない機関は患者の慣れた環境として大切に残していくことなど、多様な連携の仕方が検討された。

3) 第3回「精神看護専門看護師 実践事例検討会」

- ① 開催日時：令和元年12月19日(木) 19:00～21:00
- ② 場所：高知県立大学看護学部棟 C313
- ③ 参加人数：8名（本学大学院生2名、本学大学院修了生2名、教員4名）
- ④ 内容：クリティカルケア領域における精神看護研修の取り組みについて、今後の研修の方向性や、精神看護の楽しさをどのように伝えていくと良いかを検討した。意見交換では、今できていることを精神的ケアとして認識できるような体験を積み重ね、そのケア内容をマニュアルとして示していくこともできるのではないかといった意見が出された。事例に陰性感情を抱き、一人で悩む看護師もいるため、管理者にも協力を得ながら、語りやすい環境を工夫することもできるのではないかといった意見があった。

2. 精神看護領域に携わる卒業生・修了生の交流会

- (1) 開催日時：令和元年6月8日(土) 19:00～21:00
- (2) 場所：名古屋市内
- (3) 参加人数：13名（卒業生1名、修了生5名、前教員2名、大学院生1名、教員4名）
- (4) 内容：日本精神保健看護学会第29回学術集会にあわせ、愛知県立大学大学院の修了生の会と合同で交流会を開催した。精神看護に携わる仲間として、夕食を囲みながら、お互いの情報交換や近況などを話し、交流を深めることができた。

3. リカレント教育

(1) 高知県西部地区研修会（本学健康長寿センター・日精看共催事業）

- ① 開催日時：令和元年6月22日(土) 13:30～16:00
- ② 参加人数：一般参加者45名（看護師・准看護師43名、その他2名）、日精看役員6名、本学教員3名、大学院生2名。
- ③ 場所：渡川病院(四万十市)
- ④ 内容：この事業は、高知県西部地区の精神科医療従事者への教育機会の提供を目的として毎年実施している。今年度は、「行動制限最小化に向けて私たちができること」をテーマとして開催し、多くの参加者を得た。はじめに、精神科医療における行動制限の実態や行動制限を受ける人の体験、患者へのケアについて講演を行った。研修後半は事例を用い、隔離中の事例の体験、隔離前の暴力や隔離後の言動の背景にある思いについてグループワークを行い、隔離を解除するための観察内容、隔離解除に向けた関わりについて考えた。グループごとに話し合った結果は発表し、参加者全員で共有を行った。

4. その他の活動（精神科病院におけるボランティア活動）

1) 芸西病院「みずき祭」のお手伝い

- ① 開催日：令和元年5月26日(日) 9:00～14:00
- ② 参加者：16名（看護学部3回生14名、精神看護学領域教員2名）
- ③ 内容：長期入院の患者に付き添い一緒に参加する、地域で暮らす患者と一緒に露店の手伝いをする、患者や来場者にアロマセラピーを行うなど、学生それぞれが、ボランティア活動を通して参加者とふれあい多くの学びを得ていた。コミュニケーションをとるのが難しい患者に対し、スタッフが患者のできていることを活かしてアート作品を作成していることに気がついた学生は、「強みをケアに活かしていければいいな」と感想を述べていた。

<がん看護学領域>

1) ケア検討会

看護相談室の事業の一環として、地域の看護者とがん看護学領域の大学院生とともに、がん患者と家族へのケアの質向上を目指して、継続的に「質の高いがん看護実践を検討する会」を開催している。令和元年度は「他領域と協働し、がん患者・家族を支える看護実践」をテーマに、各回サブテーマを決めて開催した。ケア検討会では、①事例紹介、②ディスカッションポイントに沿った小グループでのグループディスカッション、③各グループで検討事項についての全体発表、④活用できる知識と事例をつなげた解説、⑤事例のテーマに沿った資料や文献の配布を行っている。また、検討会終了後は、日頃のがん看護実践に関する情報交換が行われ、参加者のネットワークを育む場として活用されている。

【第1回】在宅で療養するがん患者・家族への看護に困難を感じた事例

日 時：2019年6月15日（土）13:00～15:00

場 所：高知県立大学池キャンパス共用棟 2階講義室 D220

参加者：31名（看護職者22名、大学院生4名、教員5名）

内 容：第1回は、「家で過ごしたい」と意思表示し在宅で療養していたが、終末期の様々な苦痛症状の増強によりADLが低下し、娘一人の介護では在宅療養の継続が難しく、入院となった患者さんの事例について、ディスカッションを行った。今回は、病院や訪問看護ステーション所属の看護職者だけでなく、歯科医師や歯科衛生士の方も参加され、多職種で検討を行った。そして、患者と家族それぞれの立場の体験や思いを理解すること、なぜ「帰りたい」のか、目的を明確にすることや不安に思う家族が在宅での生活をイメージできること、社会資源や家族のサポート体制を整えることなどの必要性を共有した。また、在宅看護学領域の小原弘子先生から助言をいただき、経過の見通しをもつことができる医療者が訪問看護や地域包括支援センターにつなぐこと、「家に帰るか帰らないか」という療養場所の決定をゴールにするのではなく、患者、家族が何をしたいか、どう過ごしたいかに焦点を当て、必要な支援を考えることの大切さを再認識することができた。

【第2回】精神症状をもつがん患者・家族への看護に困難を感じた事例

日 時：2019年10月22日（火・祝）13:00～15:00

場 所：高知県立大学池キャンパス共用棟 2階講義室 D220

参加者：30名（看護職者21名、大学院生4名、教員5名）

内 容：第2回は、がんの診断を受け治療目的に入院した後に離院し、抑うつ状態や希死念慮が認められ精神科病棟へ転科となった患者さんの事例を提供してもらい、ディスカッションを行った。入院時の落ち着きのなさに看護師が気づいたときにスクリーニングすることや検査を受ける時など外来の時からソーシャルワーカーと協働して介入することなど早めの介入の必要性や、自分から訴えない患者さんに対して、看護師側から一歩踏み込んで意図的に話を聴くことの必要性を共有した。また、不安や抑うつ症状、希死念慮がある患者さんが今後治療を継続する上で、悪い知らせを伝えられる患者さんの希望を尊重し、準備性を高める支援や家族のサポート、訪問看護やデイケアの導入、経済面への支援など幅広い支援の必要性を共有した。そして、精神看護学領域の瀧めぐみ先生から助言をいただき、抑うつ症状のある患者さんは、視野が狭くなり今後の見通しをもつことができずに悲観的になりやすいため、状況に応じて肯定的な見通しを伝えていくことの重要性を共有することができた。

【第3回】認知症の高齢がん患者・家族への看護に困難を感じた事例

日 時：2020年2月15日（土）13:00～15:00

場 所：高知県立大学池キャンパス共用棟2階講義室 D220

参加者：25名（看護職者17名、大学院生4名、教員4名）

内 容：第3回は、膀胱がんの進行に伴う疼痛の増強により入院となったが、重度の認知症があり痛みを表現することが難しい患者さんの事例について、ディスカッションを行った。患者さんが体験している痛みについて、がんに伴う痛みの他、ADL低下や安静に伴う筋肉や関節の痛みがあり、何もできなくなった辛さや何をされるか分からない不安・恐怖、入院に伴う孤独感を体験している可能性を共有した。患者さんの痛みを正確にアセスメントするために、訴えることができない痛み看護師が気づくことができるように、安静時や体動時の表情、精神症状の変化を丁寧に観察することや、これまでの生活スタイルを聞き、生活の視点からアセスメントする必要性を共有した。具体的な援助として、痛みを和らげる看護援助だけでなく、目線をあわせたコミュニケーションやタッチング、以前に嗜んでいた趣味など安心や心地よさを支える援助が、特に認知症の患者さんにとって重要になることを共有した。また、老人看護学領域の塩見理香先生から助言をいただき、BPSDの背景にある困りごとに耳を傾け、痛みだけでなく生活も含めて全体を見て、その患者さんの「快」を刺激する援助が重要になることを再認識することができた。

本年度のアンケートでは、参加者全員が検討会について「満足」と評価しており、新たな知識を得ることだけでなく、他施設での取り組みなどを多職種の方々と意見交換することで、日々の看護実践へのヒントが得られ、モチベーションが高められていることが分かった。また、参加者全員が、看護実践に活用できる学びを得ることができたと評価しており、カンファレンスの時にスタッフに投げかけ、患者さんの看護の方向性を広げることや他職種と協働して看護を実践することなど、学びを通して実践への課題も見出していることが分かった。これらのことから、参加者のニーズを満たし、看護実践に活用可能な学びが得られるケア検討会であったと評価できる。ケア検討会に期待することとして、「新たな知識や援助技術を獲得したい」、「困難な事例の介入方法の手がかりを得たい」、「他施設でやっていることを取り入れたい、知りたい」という意見が多くあげられていたため、次年度も、がん看護を実践している看護職のニーズに沿う企画・運営を検討していく。

2) 卒業生との交流会およびリカレント教育

がん看護学領域では、①がん看護の質向上のための自己研鑽・情報交換、②修了生のネットワークづくりを目的として、がん看護学領域修了生の会『アストラル』を発足し、活動を行っている。アストラルは、①学習会の開催、②メンターシップ、③メーリングリスト等による情報共有、④学会参加、⑤研究、⑥ホームページ・アストラルのブログ作成という7つの活動を通じて、アストラルの繋がり強化と発展を目指している。本年度は、県外の修了生も参加することができ、自己研鑽の場になるように、2回に凝縮して事例検討会および活動報告会の開催に取り組んだ。

【第1回】事例検討会

日 時：2019年9月28日（土）12:30～16:30

場 所：高知県立大学池キャンパス共用棟2階講義室 D220

参加者：16名（修了生14名、教員2名）

テーマ・事例提供：

①家族を含めた関わりに難渋した事例

高知県・高知市病院企業団立高知医療センター 弘田 智美 氏

②急激な悪化に伴い危機に陥った終末期がん患者の家族への関わりに難渋したケース

東京女子医科大学八千代医療センター がん看護専門看護師 島田 いづみ 氏

③未成年の子を持つ脳転移のある患者の意思決定支援

ベテル在宅療養支援センター がん看護専門看護師 廣瀬 未央 氏

【第2回】事例検討・実践報告会

日 時：2019年11月23日（土）12:30～16:30

場 所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟3階講義室 C313

参加者：17名（修了生15名、教員2名）

テーマ・事例提供：

①全身状態が悪化した造血細胞移植患者・家族のケアに難渋した事例

京都第二赤十字病院 がん看護専門看護師 塚本 多恵子 氏

②AYA世代がん患者への意思決定支援

高知大学医学部附属病院 がん看護専門看護師 弘末 美佐 氏

高知大学医学部附属病院 小松 美帆 氏

③実践報告

香川県立中央病院 がん看護専門看護師 萱原 沙織 氏

3) がん看護学領域特別講義

がん看護学領域では、大学院生や修了生を対象とした特別講義を継続して開催している。特別講義では、修了生が後輩である大学院生や修了生に対して、修了後の役割開発のプロセスや日頃のOCNSとしての実践活動について語る機会を提供している。

テーマ：がん高度実践看護師の活動の実際と展望

日 時：2019年8月9日（金）13:00～15:00

場 所：高知県立大学池キャンパス看護学部棟3階講義室 C310

講 師：四国がんセンター がん看護専門看護師 宮脇 聡子 氏

参加者：12名（大学院生12名）

内 容：大学院在籍中から現在に至るまでの活動として、主要な役割機能に基づいて各々の取り組みについて講義があり、役割機能の学びを深めるとともに、がん高度実践看護師としての役割開発のプロセスを学ぶことができた。また、国や地域のニーズを捉え、所属する病院機能や役割を踏まえて、がん高度実践看護師としてどこにどのように働きかける必要があるか、課題を見出して戦略的に取り組んでいる看護の実践を学ぶことができた。がんプロ学生は、活躍している先輩の看護実践を学ぶことで、将来がん高度実践看護を担う者として奮い立たされるとともに自身の課題にも向き合う機会になった。

4) NPO 法人緩和ケア協会 第18回研究発表会

がん看護学領域では、毎年開催している NPO 法人緩和ケア協会研究発表会の企画・運営を行っている。今年度の第18回研究発表会では、看護職だけでなく医師や理学療法士など多職種との協働により、病院や診療所、地域での活動や研究的な取り組みが発表された。

日 時：2019年6月2日（日）10:00～12:00

場 所：高知城ホール

参加者：50名

演題数：9演題

<慢性期看護学領域>

1) 社会貢献活動について

高知県は、全国に比べて男性の壮年期死亡率が高く、糖尿病をはじめとする血管病対策が課題となっている。このため、糖尿病に焦点をあて、糖尿病が重症化しやすいハイリスク者の減少及び、治療中断者の減少を目的に高知県より委託を受け、糖尿病保健指導連携体制構築事業を実施した。

詳細の事業報告は、「健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

(1) モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化（2施設）

モデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化として、院内検討会の開催と、web会議システムを活用した血管病調整看護師の育成研修を実施した。また県に地域連絡会の開催を要請した。

(2) 活動手順書の作成

医療機関で糖尿病看護にあたる看護師がハイリスク患者に対して行う生活指導や関係機関との地域連携等を行うための活動手順書作成にむけて、学内ワーキングを開催した。

(3) 合同事例検討会の開催

モデル基幹病院での血管病調整看護師介入事例から各1事例を取り上げ、合同事例検討会を開催した。

(4) 活動支援

血管病調整看護師活動支援として、実践状況と活動に関するフォローアップ訪問と、ICTを利用した相談支援を行った。

(5) 事業報告会の開催

事業報告会を開催予定であったが、新型コロナウイルスの感染リスク拡大の可能性を受け、参加者や地域の皆様の健康と安全を考慮し、中止となった。

2) 研究活動について

(1) 第13回日本慢性看護学会学術集会 交流集会「SDGs時代の地域医療における慢性看護実践」において、2017～2018年度に実施した高知県立大学学長助成事業・戦略的プロジェクト研究「高知県の血管病ハイリスク群への重症化予防推進モデルの開発—慢性疾患看護専門看護師による病院と地域の看看連携を中心に—」の成果について、報告した。

(2) 2019年度、高知県立大学戦略的研究推進プロジェクト「高知県の血管病重症化予防に向けた看護職の知のネットワークづくり—ICT（情報通信技術）活用の課題—」（研究代表者：山中福子）の研究活動を実施した。活動内容は、次のとおりである（研究の全様は、「戦略的プロジェクト推進費による活動」に記載）。

①Step1：インターネット回線を用いて既存のビジネスツールを組み合わせたネットワークシステム（Ver1）を作成した。

複数のビジネスコラボレーションツールの特徴、条件、経費など検討し、Slackを選定した。参加者全員で情報交換・共有できるチャンネル、限定参加者で情報交換・共有できるチャンネルをSlack内に設定した。

②Step2：作成したネットワークシステム（Ver1）を活用し、安全性・利便性・経済性の視点から課題の明確化と修正を行い、持続可能なシステム（Ver2）を検討した。

A 県内の 2 施設の看護師のうち研究参加の得られた看護師 6 名に面接調査を行った。調査期間は 2019 年 11 月～2020 年 3 月であった。調査の結果、利用しているチャンネルは限定しており、利用用途としては連絡ツールとして使用していることが明らかになった。このことから、ネットワークシステムの活用において、安心して使用できる環境づくりと、活用したいと思える内容設定が必要であることが示唆された。

<小児看護学領域>

1) 赤ちゃん同窓会

開催日時：令和元年10月20日（日）13時～15時

開催場所：高知医療センター

当日参加人数：看護学部1・2回生12名、教員2名

内 容：平成13年度より年1回、高知医療センターと高知県立大学看護学部の共催で「赤ちゃん同窓会」を開催している。看護学部1・2回生で交流会会場の飾りつけを行い、スタッフや教員の見守る中、子どもたちと交流したり、アンパンマン体操を披露したりして、子どもと家族の楽しい時間を演出した。学生は、子どもや家族、スタッフと触れ合う機会を通して、小児看護における看護専門職者としての役割を学ぶ機会を得た。

2) 高知医療センター・高知県立大学包括連携事業

(1) 継続教育支援

開催日時：第1回目：令和元年7月29日（月）17時30分～18時30分

第2回目：令和元年9月25日（水）17時30分～18時30分

第3回目：令和2年3月中止

開催場所：高知医療センターすこやかAフロア

参加人数：第1回目：10名（医療センター7名、県大3名）

第2回目：9名（医療センター5名、県大4名）

内 容：高知医療センターすこやかAフロアと連携し、今年度も新人看護師を対象に「けいれんの子どもへの対応」をテーマとしたシミュレーション勉強会を3回計画した。シミュレーション教育は、2、3年目の看護師もけいれんを呈する子どもを看護するうえで活かすことができる知識やスキルの重複トレーニングになるため、可能な範囲で参加をお願いした。看護科長、看護副科長、臨床指導者、教員とともに、最初に疾患や観察項目、必要な看護について勉強会を行い、その知識や技術を踏まえて病棟にて模擬人形を用いたシミュレーション教育を実施した。参加者から、けいれんの症状は子どもに多い症状であることから、臨床場面での心構えができたり、安全な環境の場で繰り返し実践できるシミュレーションの強みを通して、実践の場で落ち着いた対応ができるという評価を得た。勉強会を3回企画していたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、2月～3月に開催することができなかった。来年度も、第1回目はシミュレーションの実施につながる勉強会を開催し、その後、新人看護師と2年目看護師の協力を得ながら、前期2・3回、後期2回の計4・5回の実施ができるように準備を整えていく。そして、けいれんの症状をはじめ、急変時の対応も含めた実践力の向上につながるようなシミュレーション教育の継続的な実施を看護科長と相談しながら計画していく。

(2) 臨床実践能力及び実践モデル等の開発・検証に関する共同研究

①研究成果開催日時：平成30年3月～令和元年10月末日

開催場所：高知医療センターすこやかAフロアなど

参加人数：6名（医療センター4名、県大2名）

内 容：「ビーズ・オブ・カレッジプログラム R に参加した小児がんの子どもと家族の体験」をテーマとし、半構成的面接法で得られたデータを質的記述的研究方法で分析した。結果を抽出するに当たり、対象者の語りを何度も繰り返し読み、理解したことを話し合いながら、コード化、カテゴリー化をケース毎に実施し、ケースを越えたカテゴリー間の関係性を検討した結果、10のカテゴリーが抽出された。貴重な研究結果として、第61回日本小児血液・がん学会学術集会での公表、発表支援を行った。

②研究推進

開催日時：未定

開催場所：高知県立大学看護学部または高知医療センターNICU・GCU

参加人数：11名（医療センター1名さらに増員予定、県大10名）

内 容：「命に向き合う子どもと親のエンド・オブ・ライフへの看護支援モデルの構築と活用」（研究代表者：高知県立大学看護学部教授 中野綾美）における、家族を対象とした研究をNICU・GCUの看護師とともに、共同研究として開始する予定である。新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、現在、研究活動は中断している。

3) 小児看護の魅力を語る会

令和2年3月の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の発生により中止となった。

4) 修了生の会

開催日時：令和元年8月3日（土）20時～22時

開催場所：（北海道）えりも亭

参加人数：18名（修了生・大学院生・教員）

内 容：北海道で開催された日本小児看護学会第29回学術集会に合わせて開催した。修了生の会では、医療施設や教育機関など、それぞれの勤務先での取り組みや社会情勢の中で小児看護の課題となっていることなどについて意見交換を行った。それぞれの病院や施設等における取り組みや課題を共有するとともに、子どもと家族にとっての最善を常に考え、取り組み続けることの重要性やチームでの情報共有のあり方など、多岐にわたる視点での意見交換が行われた。

5) 大学院事例検討会・特別講義

(1)第1回小児看護学領域事例検討会

日時：令和元年7月21日（日）15時～17時

参加者：14名（修了生、教員）

修了生を話題提供者に迎え、障がいのある子どものケアについて事例を通して検討した。

(2)第2回小児看護学領域事例検討会

日時：令和元年11月11日（日）14時～16時

参加者：16名（修了生、教員）

修了生を話題提供者に迎え、NICUの子どものケアについて事例を通して検討した。

(3)第3回小児看護学領域事例検討会

日時：令和2年2月9日（日）14時～16時

参加者：18名（修了生、卒業生、教員）

修了生を話題提供者に迎え、医療的ケアを必要とする子どもの在宅移行について事例を通して検討した。

(4)小児看護学領域特別講義(修了生キャリア支援)

講師：濱田米紀氏（兵庫県立こども病院 看護師長 小児看護専門看護師）

日時：令和2年2月9日（日）9時～12時

参加者：14名（修了生、卒業生、教員）

昨年度より修了生のキャリア支援として、小児看護専門看護師に必要な実践能力についての特別講義を行っている。今年度は特別講義時に、講師の小児看護専門看護師に修了生3名が、実践で取り組んでいる課題についてのコンサルテーションを行う時間を設け、参加者でのディスカッションを行った。

＜母性・助産看護学領域＞

1) 教育・研究活動

(1) 助産看護および母性看護実習施設について

今年度は JA 高知病院の実習が再開となり、助産看護実習は高知医療センター、高知赤十字病院、幡多けんみん病院、JA 高知病院、国立高知病院の 5 施設、母性看護実習は、高知医療センター、高知赤十字病院、JA 高知病院の 3 施設で実施した。

(2) 戦略的研究推進プロジェクト

① 「看護学研究科博士前期課程：教育イノベーション事業」

博士前期課程研究コース母性看護学領域の 2021 年度開設に向けて、教育課程の検討、教育・研究環境の整備、学生募集にかかる準備を行った。

② 「高知県における精神障害をもつ女性の妊娠・出産・育児への看護支援モデルの開発」

精神障害をもつ女性への看護支援を行ったことがある医療従事者を対象にインタビュー調査を実施した。その結果をもとに「高知県における精神障害をもつ女性の妊娠・出産・育児への看護支援モデル」の作成を行った。

2) 高知医療センターとの包括連携

(1) 病院前妊産婦救護に関するシミュレーションコース BLSO の支援

本事業の目的は、救急隊員が妊産婦救急の場面に対応できる力をつけること、救急隊員と周産期に関わる医療従事者がメンタルモデルを共有し連携する能力の習得であり、包括的連携事業として実施している。講師は NPO 法人周産期医療支援機構のインストラクターが担当している。

今年で 3 年目となる本研修会は、9 月（プロバイダーコース）と 2 月（インストラクターコース）の 2 回開催され、参加者総数は 35 名であった。これらの取組みが、南海トラフ大地震発災時の妊産婦の救護への備えとつながっていくことが期待されている。

3) 地域貢献活動

(1) 令和元年度母性助産看護学領域交流会

本学助産コースの卒業生間ならびに教員との交流を目的とし、令和元年 10 月 4 日（金）に高知市内で交流会を開催した。参加者は、助産コース卒業生 9 名と教員 6 名であった。自己紹介、勤務先での経験を含む近況報告、学生時代の思い出を語り合う機会となり、交流を深めることができた。

(2) リカレント教育「周産期にみられる症状・兆候を見逃さないアセスメント力を身につけよう！」

本研修会は、周産期にみられる症状・兆候に対するアセスメント力の向上を目的に、卒後 1～2 年目の看護職者を対象に実施している。3 回目となる今年度は、令和元年 11 月 8 日（金）に開催し、卒業生を含む県内の産科病棟に勤務する助産師 3 名が参加した。今回のテーマは「意識障害」であり、高機能シミュレーターを用いて状況を再現し、フィジカルアセスメント、および、チームでの対応を学ぶ機会とした。参加者の感想には「医師の指示があれば動けるが、自分の判断にまだまだ課題があることに気付いた」「普段関わることの少ないハイリスク事例をシミュレーションすることで、自身の知識が乏しいことを再認識した。リスクがなくても起こりうるという意識を持っていきたい」などがあり、自己の課題に気付く機会となった。

(3)地域の消防とのつながり

BLSO 研修会をきっかけとして、消防主催の訓練に大学教員・学生が妊産婦役割として参加するなど、消防と大学との交流ができた。BLSO 研修会後の消防署内における伝達講習会では大学から必要物品の貸し出しを行い、病院前妊産婦救急の継続教育の支援につながった。

<地域看護学領域>

1) 高知県保健師人材育成

高知県保健師人材育成プログラムによる活動として、高知県健康長寿政策課と協働で取り組んでいる。本年度は、新任期及び中堅期保健師の育成に関する研修の企画・実施の助言と、講師をおこなった。

(1) 新任期保健師育成支援

①集合研修

高知県内保健師 1 年目から 4 年目を対象として、保健師として必要な能力を段階的に獲得することを目的として、OJT と Off - JT を組み合わせたプログラムとして実施した。詳細は「10.健康長寿センターにおける看護学部の活動」の「5)高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動 (1)高知県新任保健師研修会」に報告している。

②新任期保健師育成に係わる OJT 担当者会

プリセプターや管理者を対象にした研修では、昨年度作成した新任期保健師支援プログラムの説明と共に、目標管理、組織管理や人材育成を効果的に実施するための講義をおこなった。また、情報交換をとおり、組織全体で人を育てる意識と、人を育てるために望ましい体制づくりについて検討することで、人材育成に必要な知識と技術が習得できる機会となった。なお、第 2 回プリセプター能力育成研修は、3 月 16 日に、育成計画の評価に関するグループワークを予定していた。しかし、新型コロナウイルスの県内発生、及び感染拡大防止のため中止となった。

【第 1 回プリセプター能力育成研修】 参加者：49 名

日 時：令和元年 5 月 8 日（火）13：30～16：30

内 容：前半 講義『新任保健師支援プログラム』行動目標とは何か 講師 小澤若菜

後半 講義「プリセプターの役割と目標設定について」 講師 時長美希

グループワーク助言者：小澤若菜（1 年目保健師担当）・川本美香

・畠山典子

(2) 中堅期保健師育成支援

高知県の行政機関に所属する中堅期保健師育成支援として、保健活動評価研修を行った。研修は、PDCA サイクルに基づく保健活動全体のマネジメント能力の強化と、地域ケアシステム構築を推進できるよう実施している。この研修では、集合研修（計 6 回）での講義、演習およびグループワークと、各市町村（2 箇所）に出向いたコンサルテーションをおこなった。

①保健活動評価研修—集合研修—

【第 1 回】令和元年 5 月 17 日（金）10 時～16 時

講師：時長美希 受講者：4 名

講義「ニーズに応じた地域ケアシステムづくりの展開と評価方法」

演習「演習で取り上げる活動の位置づけを確認、機能する支援システムについて現状分析、課題抽出を行う、目標を明確にする」

【第 2 回】令和元年 5 月 28 日（火）10 時～16 時

講師：時長美希 受講者：5 名

グループワーク：目標設定までの全体を通して確認

【第3回】令和元年6月20日(木)10時～16時

講師：時長美希 受講者：5名

講義「地域ニーズに応じた地域ケアシステムづくり・目標に応じた実施計画・評価の考え方」

演習「実施計画、評価計画策定」

【第4回】令和元年7月2日(火)10時～16時

講師：時長美希 受講者：8名

グループワーク「評価計画までの全体をとおして確認」

【第5回】令和元年8月27日(火)10時～16時

講師：時長美希 受講者：4名

講義「地域ニーズに応じた地域ケアシステムづくり・評価計画を見直し次の方向性をつかむ」

演習「評価計画の見直しと評価の視点の確認」

【第6回】令和2年2月17日(月)10時～16時

講師：時長美希 受講者：3名

講義「地域ニーズに応じた地域ケアシステムづくり・評価の実施から次年度の方向性をつかむ」

演習「評価計画の見直しと評価の視点の確認」

②保健活動評価研修—コンサルテーション—

①の内容をふまえ、地域ケアシステム構築に関して、県内3カ所(いの町、須崎市、高知市)において、コンサルテーションを行った。

(3) 福祉保健所管内新任期保健師研修

福祉保健所が開催する管内新任期保健師・中堅期保健師の人材育成に関する研修では、集合研修の課題提出に向けたフォローアップとして個別課題の取り組み状況について確認をおこなった。また、人材育成の充実を図るため、プリセプターや管理者が支援する能力を高める講義やグループ討議での助言をおこなった。

・中央東福祉保健所

日時：令和元年11月5日(火)13:30～16:30 1～4年目保健師 参加者：13名

内容：講義「地区診断・PDCAサイクルの要点—普段の気づきを活かした展開—」

課題に関する個別面談：川本美香

・中央西福祉保健所

日時：令和元年9月11日(水)10:00～12:00 1～4年目保健師 参加者：15名

内容：講義「普段の気づきを活かした展開—新任期保健師研修の課題を活用して—」および課題に関する個別面談、情報交換による交流：川本美香

・須崎福祉保健所

新任期保健師・プリセプターフォローアップ研修会 参加者：29名

日時：令和元年9月30日(月)10:00～16:00

内容：1. 午前の部：A班(1年目)・B班(2年目)プリセプター

グループワーク(10:00～12:00) 助言者：畠山典子

2. 講義：「PDCAサイクルと業務の展開」講師：畠山典子

午後の部：C班(3年目)・D班(4年目)プリセプター

グループワーク 助言者：畠山典子

市町村事業報告・新任期保健師研修会個別指導 参加者：10名

日時：令和2年1月30日(木)13:00～16:00 助言者 畠山典子

・幡多福祉保健所

管内新任保健師研修会

日時：令和元年 11 月 14 日（月）13 時～16 時 30 分 参加者：15 名

内容：集合研修の課題に関する発表、グループワークの助言 助言者：小澤若菜

2) 地域保健活動支援

高知県健康長寿政策部健康長寿政策課、高知県健康政策部健康対策課・福祉保健所地域支援室と協働し、各管内の地域保健活動の取り組みに関する研修会の講師や助言を行った。また、市町村が取り組む保健活動への参画、助言を行った。福祉保健所の地域保健活動報告会では、市町村の様々な事業や保健活動に関する報告を通して、参加者同士、活発な意見交換や質疑応答がなされた。報告会での助言を通して、参加者が、保健活動の評価の視点や方法を学び、より効果的な実践を目指す機会となった。高知県国民健康保険団体連合会の保険者への保健事業支援・評価等を行っている。国保連合会の事務局と事前協議、実施後の振り返りを行いながら、効果的な保健事業の推進を図るための支援を行った。

(1) 高知県

①安芸福祉保健所管内保健福祉活動報告会

令和元年 2 月 26 日（水）13：30～16：45

発表者 8 名に対する書面による助言

②須崎福祉保健所管内保健福祉活動報告会

令和 2 年 2 月 17 日（月）13：30～16：00 参加者 51 名

管内における保健福祉活動の実践事例から、効果的な保健活動の展開方法

：助言者 畠山 典子

③高知版ネウボラ推進の取り組み

高知県で策定している「日本一の健康長寿構想 第 3 期構想 Ver.3」大目標Ⅲ厳しい環境にある子どもたちへの支援、大目標Ⅳ少子化対策の抜本強化において、「高知版ネウボラ」の推進が掲げられている。その取り組みとして、県主催の中央研修会を実施した。

・令和元年 5 月 27 日（月） 13:30～16:30(参加 17 市町村, 5 福祉保健所 計 32 名)

高知県母子保健コーディネーター等（初任者）研修会 講師 畠山 典子

・令和元年 2 月 14 日（金） 10:00～16:00 （参加 16 市町村, 5 福祉保健所 計 32 名）

高知県母子保健コーディネーター等（現任者）研修会 講師 畠山 典子

・令和元年 7 月 25 日（水）10:00～16:00 （参加 26 市町村, 5 福祉保健所 計 51 名）

子育て世代包括支援センター連絡調整会議 助言者 畠山 典子

・令和元年 6 月 18 日（火）10:00～16:00 （参加 23 市町村, 5 福祉保健所 計 57 名）

「総合相談窓口機能強化のためのスキルアップ研修会（前期）」 助言者：畠山 典子

・令和元年 12 月 24 日（火）10:00～16:00 （参加 26 市町村, 5 福祉保健所 計 47 名）

「総合相談窓口機能強化のためのスキルアップ研修会（後期）」 助言者：畠山 典子

(2) 市町村

①高知市男女共同参画センターソーレとの共同事業 女性防災プロジェクト

第 1 回 令和元年 5 月 25 日（土）：参加者 20 名 13:30～16:30

第 2 回 令和元年 6 月 1 日（土）：参加者 21 名 8:30～17:30 フィールドワーク

第 3 回 令和元年 6 月 15 日（土）：参加者 27 名 13:30～16:30

第 4 回 令和元年 7 月 13 日（土）：参加者 23 名 13:30～16:30

助言者 神原咲子・畠山 典子

②宿毛市母子保健推進協議会研修会

【第1回】令和元年6月10日(月)

参加者：母子保健推進員18人、保健師・栄養士8人、多福祉保健所2人 計28人

内容：母子保健推進員の活動と地域で支える妊産婦支援 講師：畠山典子

グループワーク

【第2回】令和2年2月25日(月)

参加者：母子保健推進員18人、保健師・栄養士7人、計25人

内容：令和元年度母子保健推進員の活動のまとめと次年度の活動計画 講師：畠山典子

グループワーク

③土佐清水市個別事例検討会

日時：令和2年2月28日(金) 13:00~16:00 (参加者10名)

アドバイザー 畠山典子

(3) 高知県保健師人材育成評価検討会

第1回は、高知県保健師人材育成評価検討会設置要項(案)および福祉保健所・各団体における令和元年度の保健師人材育成関係事業計画について、行政保健師確保対策、保健師確保対策の1つとしての実習の在り方について、情報共有および意見交換を行った。第2回は、令和2年度事業計画、保健活動評価研修の効果的な実施について、県内3大学の地域看護に関する実習の実績および実習計画について、メールを活用した書面会議となった。

第1回 令和元年7月9日(木)

第2回 令和2年3月10日(火) 開催予定であったが、書面会議として実施

(4) 高知県国民健康保険団体連合会保健事業支援評価委員会

高知県国民健康保険団体連合会の委員及びアドバイザーとして、時長美希、小澤若菜が参画し国保・後期高齢者ヘルスサポート事業への支援を行っている。本事業は、国保データベースを活用し、保険者等が保健事業に係る計画の策定・実施の支援、実施された保健事業の評価ができるよう、委員会において個別支援、情報交換を交えた集団支援を行うことである。

今年度も、委員会活動として、主にデータヘルス計画策定支援と、保険者における個別保健事業の計画作成・実施支援と評価等を行った。

第1回 令和元年7月4日(木) 13:00~15:00 基本方針の決定

第2回 令和元年9月5日(木) 13:00~17:00 個別支援 4保険者

第3回 令和元年9月19日(木) 13:00~17:00 個別支援 5保険者

第4回 令和元年12月4日(水) 13:00~17:00 集団支援 12保険者

第5回 令和2年2月20日(木) 13:00~16:00 高知県後期高齢者医療広域連合への支援等

3) 保健師交流大会

毎年、4月に実行委員会を立ち上げ、市町村衛生職員協議会、職能団体、教育機関、高知市、高知県の保健師が企画・運営を行っており、本学も教育機関として参画している。

今年度は、「保健師の働き方を考える」をテーマに、開催した。詳細は「11.高知県保健師交流大会」にて報告している。

4) 学生のボランティア支援

(1) 高知市保健所健康増進課「高知市いきいき健康チャレンジ2019」

3、4回生の学生延べ13名が参加し、高知市民の方の健康づくりのサポートに取り組んだ。この事業は、早期からの健康な生活習慣づくりを目指して、高知市民200名程度が参加するものである。参加した学生は運営サポートを行う中で、市民の方々や保健師等専門職の皆様とも交流し、住民の生活習慣病予防の取り組みや健康づくりに関する意識を高めるきっかけとなる取り組みを体験した。また、本事業を通じて多職種連携や、住民の健康づくり対策等についても学ぶ機会となった。

日時：令和元年6月9日（日）、令和2年2月9日（日） 場所：高知市保健所

(2) 高知市一宮トーメン団地自治会「第5回桜まつり（桜ウォークラリー）」

令和元年3月29日（日）12名の学生が参加予定で、自治会との打ち合わせを2回実施したが、新型コロナウイルス感染拡大防止を考慮し、学生参加は中止となった。

5) 高知県看護協会保健師職能委員の活動

高知県内の保健師職能委員と共に、保健師のネットワークの強化や、人材育成に関する課題解決、地域包括ケアの構築に向けた役割の明確化を図るため、さまざまな組織の委員と共に、教育機関として活動し、事業運営や研修の企画を行っている。

今年度は、次世代育成事業として、高知県の子どもの生きる力を育むいのちの教育を推進するため、三職能委員会で検討し、次年度からの行動計画を策定した。また、保健指導ミーティング及びファシリテーション研修会を市町村衛生協議会保健師部会との協働により開催し、アフターミーティングでは、事業の振り返りと、今後の人材育成の在り方について検討を行った。

6) 全国保健師教育機関協議会の活動

(1) 第8回全国保健師教育機関協議会 秋季教員研修会の開催

日本公衆衛生学会の開催県で行われる秋季教員研修会の企画・運営を、全国保健師教育機関協議会の研修委員会と共に行った。本研修会は、公衆衛生看護学をコアとする保健師教育の充実と教育の質向上を目的に毎年開催されている。研修のねらいとして、教育機関と実践の協働による公衆衛生看護学の発展について意見交流を行うこと、保健師のモデルコアカリキュラムを理解し、教育への反映について考えることである。

学会開催県として、高知大学、高知学園短期大学の地域看護学領域の教員にも協力を依頼し、実行委員会を開催し、研修会開催準備に向けたプログラム、準備、当日運営について協議を図った。

研修会のテーマは、これまで取り組んできた高知県と教育機関との協働で取り組む保健師の人材育成に関する報告を企画した。講師として、高知県の保健師人材育成担当課である、健康長寿政策課の保健推進監中島信恵氏に依頼し、高知県の現状と課題を踏まえた、人材育成ガイドライン策定に向けた取り組みや、今後の展望について講演いただいた。参加者からは好評を得ることができた。また、「もう少し講演の時間を増やしてほしい」という要望もきかれた。

(実行委員会)

第1回秋季教員研修会実行委員会 令和元年10月10日（木）18：00～

第2回秋季教員研修会実行委員会 令和元年10月22日（火）10：00～

第3回秋季教員研修会実行委員会 令和元年10月25日（金）9：30～

実行委員 高知学園短期大学 大西昭子委員、高藤裕子委員、高知大学 齋藤美和委員、

高知県立大学 時長美希（委員長）、小澤若菜委員、川本美香委員、畠山典子委員
(秋季教員研修会)

日時：令和元年10月26日（土）9：30～11：30

場所 高知市文化ふらざかるぽーと中央公民館 11階大会議室

講演内容

9：40～10：40

「教育機関と協働で取り組む保健師人材育成」

講師 中島 信恵（高知県健康政策部健康長寿政策課 保健推進監）

時長 美希（高知県立大学看護学部 教授）

10：50～11：30

「保健師基礎教育の検討状況とこれからの本協議会の活動について」

講師 岸 恵美子（全国保健師教育機関協議会 会長）

講師 平野 かよ子（宮崎県立看護大学 学長）

座長：齊藤 恵美子（全国保健師教育機関協議会 副会長）

参加者数 57名（会員校50名、非会員校7名）

(2) 中国・四国ブロック定期会議・研究会

目的：保健師教育機関相互の連携を密にして、保健師教育に関する研究・協議を行い、
日常の教育活動に活かし、その向上発展を図る。

日時：令和元年9月28日（土） 10：00～14：45 岡山

平成30年度中国・四国ブロック活動報告

意見交換

研究会テーマ：「公衆衛生看護管理を学生にどう教授していくか」

グループディスカッション

参加者：時長美希 畠山典子

(3) 四国ブロック研究会

目的：「公衆衛生看護のプロフェッショナルリズムー学び合う文化の醸成」をうけ、他分野の
専門職によるコミュニティづくりを学び、日常の保健師の地区活動や教育活動にいかし
ていくことを目的に企画しました。

日時：令和2年1月10日（金）16：00～18：00 愛媛

テーマ：「地域診断を活かした健康まちづくり～保健師活動とまちづくり活動の連携」

内容：1) 公衆衛生における地区診断・地域診断の歴史とまちづくりの親和性

2) 保健師と連携した地域診断法ワークショップの実践とその後の住民主体の
健康づくり活動の事例

3) 保健師による地域診断法ワークショップの活用

企画運営委員：時長美希

＜在宅看護学領域＞

1) ケア検討会

在宅看護ケアの質向上、在宅看護のネットワーク作りを目指し、看護学部看護相談室事業として、在宅看護領域ケア検討会を3回実施した。

第1回は「残存能力を維持、活用しながら在宅生活を続けていくための支援」をテーマに事例検討を行った。廃用症候群が進行し、家族の介護負担も増大している事例に対し、体調管理や症状進行のモニタリングが重要であること、看護の役割を明確にしつつ、他職種との役割分担をすること、ケア全体の組み立てや社会資源利用のキーとなるケアマネージャーと、お互いの専門性を尊重しあう関わり方、本人、家族も交え、多職種で目標共有する大切さなど、たくさんの視点を得ることができた（参加者9名）。

第2回は、「医療用麻薬使用への強い不安がある場合の支援」について検討を行った。がん末期の呼吸困難に対し医療者は麻薬による症状緩和を提案したいが、家族が麻薬使用に対する強い不安を持っており、本人への麻薬使用提案を拒んでいる事例であった。麻薬導入に関して本人が意思決定できるよう、家族の不安に寄り添いながら信頼関係を構築し、「本人の意思を尊重し、サポートする」体制を整えること、麻薬導入する場合は、看護師がいる場で行い、家族の不安や負担の軽減に努めること、焦らず、本人や家族の受け入れ状況を見ながら成功体験を重ねていくことなど話し合った。常に本人を中心に、ケアの受け入れのペースを考えた関わりが大切であることを確認できた事例であった（参加者9名）。

第3回は、「病院外来から地域へつなぐ認知症支援」について、訪問看護師だけでなく、病院外来、病棟、退院調整部門、地域連携、継続看護部門、看護管理部門など、病院の様々な部署の看護師が参加した。事例は、外来通院中に次第に認知機能が低下しているが、本人は他者からのサポートを求めている独居高齢者であった。認知症の病期と今後の進行予測に基づき、今が介入のチャンスであることを全員で確認した後、顔なじみとなり信頼を得る方法、ご本人の残存能力を活かす方法、居住地を考慮した利用できる社会資源と関連職種、ご家族との連携、社会的交流を増やす方法など、実践経験を交えた様々なアプローチを検討することができた。看護の視点から介入の必要な方を捉える外来看護師、地域でご本人らしさを保ちながらの生活を支援する訪問看護師、病院と地域を繋ぐ看護師など、それぞれの強みを活かして活発な意見交換ができた（参加者18名）。

ケア検討会は、訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師の方々だけでなく、病院の様々な部署で働く看護師が参加、事例提供してくださっている。それぞれの視点から意見を出し合うことで、よりよいケアを考えるとともに、お互いの立場や役割の理解もでき、看護師同士の連携強化についても考えることのできる場となっている。

2) その他の健康長寿センター事業の展開

上記事業以外に、以下の健康長寿センター事業に領域教員が中心となって事業展開を行なった。なお、詳細の事業報告は、第1部「10.健康長寿センターにおける活動」にて報告している。

4) 地域医療介護総合確保基金事業

- (1) 中山間地域等訪問看護師育成講座
- (2) 高知県介護職員喀痰吸引等研修
- (3) 退院支援体制推進事業

5) 地域連携事業

- (1) 土佐市連携事業
- ②地域ケア会議推進プロジェクト

3)中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築への支援

中央西福祉保健所管内地域包括ケアシステム構築に向け、以下の会議等にアドバイザー等として参画し、支援を行なった。

- (1)公立病院連絡会
- (2)地域連携室連絡会
- (3)土佐市地域包括ケア意見交換会

<看護管理学領域>

1) ケア検討会

令和元年度は、領域責任者の交代もあった為、現場の看護管理者の皆様の声に耳を傾けつつ、大学としての役割機能を果たすために何が大切なのかを改めて問いかける形式をとった。3回のケア検討会それぞれにテーマを明確にする形式をとり、回を重ねる毎に参加者も増えた。

また、運営側は、ケア検討会が心理的に安心安全な場となるようマネジメントに努めた結果、参加した看護職ひとり一人が感じたことを現場の生の意見として語り、共感し合うことができ、組織や職位を越えた学びの場として機能することが実感できた。

(1)第1回ケア検討会：令和元年6月21日(金) テーマ：「何のため」を問う 16名参加

令和元年度最初のケア検討会は、本学看護管理学領域の大学院生による話題提供を通して、「何のため」を問うことの意味を議論する検討会であった。「全員が自分の意見を自分の言葉で発言し、発言する人の意見は否定せず傾聴する」というルールに則り、看護管理者やスタッフ、看護管理学の教員ら16名の参加者によって、多様な視点に基づいた活発な議論がなされた。

話題提供者からは、自身の経験を通じて、オーストラリアの臨床現場における「ノーリフトポリシー」の実態についての報告が行われた。「ノーリフトポリシー」に則り、移乗や体位変換操作を人の手で行うこと(マニュアルハンドリング)を徹底して排除し、そのために必要となる補助具を豊富に導入すると同時に「ノーリフトポリシー」は基礎教育から継続教育まで徹底的にその必要性についての理解を深める体制が整備されている。そして、それらのとりくみが「何のため」になされているのかについて、労働者や患者の安全、リスクマネジメントの視点も交え報告された。参加者に対しては、日々当たり前とされている考え方や業務、職場環境に対し「何のため」、「誰のため」、そして「どう実現する」ことができるかという投げかけがなされた。

参加者からは、日々過ごしている現場において「何のため」を問うことの重要性は理解できるがそれができない現状や管理者の「何のため」という問いとスタッフの問いの違いが語られた。また、どうすれば管理者、スタッフ含め全員が「何のため」という問いを主体的になすことができるかという議論がなされた。その議論の中で、日々「何のため」という問いをどれだけ立てられているか、スタッフに対し問うことを促すことの意味、スタッフから問われることの意味について参加者自身の経験を通じた内省がなされている場面もみられた。

最後に、「何のため」を問うことは困難ではあるが、日々直面する問題の本質を見出そうとする際、問いを立てることは重要であること、そして、問いを当事者同士で共有し、少しずつ行動に踏み出していくことが第一歩ではないかというまとめとともに、閉会した。

参加者に向けたアンケートからは、「何のために」を考えることの大切さを学ぶことができた」「日頃の自分自身の言動に気づくことができた」「何気ない言葉の深さを考えられた」「参加者の方々が様々な視点からビジョンを持って考えていることが知れた」等の評価が得られた。

また、第1回のケア検討会で話題提供した「ノーリフトポリシー」は翌月開催予定の高知女子大学看護学会でのワークショップテーマであることも紹介し、本学の他の事業との連携にもつながりを持てた。

(2)第2回ケア検討会：令和元年10月4日(金) テーマ「ジレンマ」と向き合う 24名参加

第2回目のケア検討会は、現場の新任看護管理者の方より、1年目の看護師長としての役割遂行における戸惑いとジレンマに関して話題を提供していただいた。その後、中間管理職として、組織の目指す方向性は理解していても、現場を大切にしたいからこそ生まれる「ジレンマ」について、意見を交わした。参加者は、所属施設・部署、役職や管理経験年数もさまざまであり、横

断的に意見を交換するなかで、それぞれの視点から事例についての質疑応答がおこなわれ、さらに経験談も共有された。

各施設での新人ナースの夜勤開始時期や人員配置の実際とそれらに影響する設置主体上の規定、部署の診療科特性、部署間格差や新人ナースの個人差、先輩スタッフからの不安の訴え、役職間やスタッフ間でのコミュニケーションなどが話題となり、事例の背景理解と状況の共有につながっていた。こうした事例理解の下で、事例提供者の方々が、中間管理職として新人ナースの夜勤開始に関する役割の遂行上の戸惑いや「ジレンマ」とどう向き合うのかについて、大学院生から視点を整理するための参考として、事例に関連する研究論文の紹介をした後に、参加者間で意見交換をした。

1年目看護師長のサポートについては、組織の支援として、同じフロアに師長のプリセプターを配置、部署で開始時期や方法を決められる権限付与、教育担当などの第三者を活用するなど挙げられた。さらに、事例提供者の戸惑いに対しては、先輩看護師長も通ってきた道であるという言葉や研究論文の紹介による共感的な情報共有が、事例提供者の不安軽減の一助となった。その他にも、新人ナースの夜勤の目的の明確化、ひとり立ちの意味を新人と先輩で共通認識できるように言語化する必要性も述べられた。

部署や組織を超えた現場の看護管理者の経験知に基づく貴重な意見交換により、今回の事例がもつ問題の本質を、事例提供者と参加者が共に理解を深め、それぞれの立場で「ジレンマ」と真摯にどう向き合うのかを内省するケア検討会となった。

(3)第3回ケア検討会：令和2年1月10日(金) テーマ「平等、公平、公正」48名参加

第3回目のケア検討会は、話題提供者の方より、テーマに沿って管理者として直面する課題についての現状報告後、その内容に沿って、現場の看護管理者やスタッフの本音が語られた。

経験年数は同じでも能力に差が生じる。同じ業務量でも、一方は時間内に終了するが、もう一方は時間内には終了しない。固定チームナーシングの時から、あった問題ではあるものの、近年、PNS方式に取り組むことをきっかけに、日々の業務の内容を可視化する場面が増えてきた結果…仕事を効率的に終わらせるスタッフとそうでないスタッフの間で「不公平感」が表面化してきている。新人と中堅の間では、抵抗なく業務を引き受け、相手をフォローしながら業務を遂行し、業務の優先順位や組み立てについて指導出来るのに…。日々の業務でPNS方式を実践していく中、個人の価値観や考え方を大事にし、効率的にパートナー同士が補完し合いながら業務遂行を目指している。その中で、経験年数や個人の能力を踏まえ、管理職としての“公平性”について活発な意見交換がなされた。

参加者は、所属施設・部署、役職や看護方式もさまざまであり、管理職として公平という観点でのスタッフへの評価、スタッフからの不満の訴えへの声掛け、リーダーの負担軽減、組織風土、業務調整とそれぞれの視点から事例についての経験談が共有された。各施設で類似経験年数による能力の差、業務の調整方法、ペアの相互作用が話題となり、事例の背景理解と状況の共有につながっていた。

前半の事例を通じた意見交換の後、大学院生から視点を整理するための参考として、事例に関連する研究論文の紹介をし、更に議論を深めた。

PNS方式による看護師のペアリングのプロセスが可視化され、問題が表面化されてきている中「公平性」の重要性は理解できるが、経験年数による能力の差、報酬と業務量、能力と業務量、働き方の価値観の評価をどうすれば管理職がスタッフ含め全員の納得性を高めていけるのかについて議論がなされた。PNSにおいて、お互いに弱みを補完しながら強みに変えていくスタッフ間の相互作用を強化していく仕組みを活かすには、管理職として公平性・不公平性のプロセスにおけ

る自分自身の戸惑いを含めスタッフに説明し、スタッフの価値観を咀嚼しながら、少しでも公平性を担保し病棟全体として成長につなげていくなどが挙げられた。

また、今回は、幡多けんみん病院からビデオ会議による参加もあり、遠隔操作における技術的な課題もあったが、遠隔地からも気軽に参加できる仕組みづくりへの第一歩となった。

話題提供者は、最後までモヤモヤが残った様子ではあったが、正解がないマネジメントにおける「公平性」という問題に対して、それぞれの立場でどのように向かい合うのかを考えるケア検討会となった。今後も、参加者にとって、ケア検討会が、現場で抱える困り事と真摯に向かい合い、共に学び、語り合える場となるように企画・運営していきたい。

【参加者からの主な意見】

- ・ 共感できる意見が多く、充実できた。公平・平等、奥深いテーマで、考えさせられた。
- ・ 学びになった。平等と公平、公正をどう考えるか、PNS に対する考え方や課題についても、様々な意見が聞けて良かった。
- ・ 普段聞かれない管理職のNsの意見、副看護長の思いを知ることが出来た。
- ・ 他の方の意見を伺うことで、同じ悩みを持っていることを知り、今後の励みとなった。透明性を伝えていく、説明の努力をしていくこと努力していきたいと思う。
- ・ いろんな施設の方の意見がきけて納得できることがたくさんあった。
- ・ 答えのないテーマだからこそ、他の人がどう思っているか（考え）をきけてよかった。



2) リカレント教育

令和元年 11 月 9 日(土)、高知市にて、領域責任者の久保田より「健康長寿センターの取り組みと看護管理実習のご紹介」というテーマで本学の取り組みを看護管理学領域の修了生に対して講義形式で実施した。博士前期課程および後期課程の修了生、在學生、教員を含め高知県内から 11 名の参加があった。

今年 10 周年を迎えた高知県立大学健康長寿センターでは、高知県を「日本一の健康長寿県」にするための実働部隊として取り組んでいる 5 つの活動がある。その中でも今回は「高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動」の一つである「地域・病院・多職種・入退院支援事業」の概要や研修事業、相談事業の具体的な内容についての報告があった。それぞれの病院・地域において目指す姿を共有し、地域地域で安心して住み続けられる仕組みづくりには、何が課題で、何が大切なのかを共有する過程こそが、事業の根幹であると説明された。

次に、看護管理実習については、実習の目的や実習の全体像、具体的なスケジュールの流れについて説明された。そして、現象を俯瞰し、論理的思考をもってシステムとして捉える事「何のため？」を問うことの必要性を、基礎教育の段階でこの実習を通して学ぶことの意味について語られ、参加者とともに、活発な意見交換が行われた。

3) 交流会

令和元年11月9日(土)に高知市内にて、リカレント教育実施後に交流会を実施した。美味しい食事を囲み、修了生と在校生が現状報告と同時に看護管理への熱い思い、そして、リカレント教育での学びや気づきを共有した。研究や実践を通して、日々悩みながらも取り組んでいる課題、そして目指す目標を熱く、語り合った。博士前期課程の在學生にとって修了生との貴重な交流の場となり、現在学んでいる看護管理と実際の現場における看護管理を融合させるための機会となった。修了生にとっても、久しぶりに看護管理学を語る貴重な機会であり、今後も頑張ろうというエネルギーにつながったとの意見が聞かれた。同じ領域で学び合う者同士だからこそ得られる交流と同時に自己を振り返り、明日からの一歩に活かすことができる有意義な会となった。

4) 抄読会

大学院看護学研究科の看護管理学を専攻している博士前期、後期課程の学生と看護管理学の教員が参加して、研究論文の抄読会を週に1回実施している。令和元年度も、4月から開始し、夏季、冬季休業期間はお休みとし、2月まで、毎週実施した。プレゼンターは大学院学生が担当し、研究のレビューとクリティーク、実践への活用について活発に討議している。本年の対象論文は、32本であった。また、冬季にはインフルエンザ対応もあり、遠隔会議システムを活用した抄読会も実施された。今後は、実践リーダーコースの学生が、職場から参加できる環境にもつなげていきたい。

5) 課題と評価

看護管理学領域では、年に3回のケア検討会を企画運営することを目標にしており、今年度も達成できた。また、高知県下の看護管理の学際的ネットワークの構築・維持と同時にケア検討会での議論の深まりも考慮して、毎回20名程度の参加を目指してきた。本年度は、テーマを明確にし、そのテーマに沿った話題提供や議論を深める論文提供等が功を奏し、第3回では、48名の参加者となった。第3回には、遠隔会議を試みたこともあって議論の深まりという点においては、課題が残っている。特に、参加人数の多い会の特徴をみていると特定の施設からの参加者が多い傾向にある。その点については、今後どのような形で運営していくか検討が必要である。

リカレント教育・交流会についても、ここ数年同様の形式をとってきたが、本年度は他の大学の行事(高知大学看護学会等)との重なりもあり、参加者が少なかった。これまで、培ってきた修了生のネットワークを活かしつつも、次の展開を検討する必要があると思われる。

また、看護管理学領域の抄読会は、博士前期課程には研究コースの大学院生が多く、後期課程の学生参加もあり、クリティークの質が高くなってきたことは実感できた。しかし、一方では、臨床現場の実践リーダーコースの学生の参加回数は少なく、クリティークする力の差が大きくなることが危惧される。今後は、遠隔会議システム等も活用し、実践リーダーコースの学生にとって、少しでもその差が是正されるよう環境を整えていきたい。

<老人看護学領域>

令和元年度、老人看護学領域では看護相談室の活動としてケア検討会を実施した。

1) ケア検討会

現場での事例をもとに、病院・施設で働く看護職の方々と事例検討を行った。高齢者への理解を深め、様々な観点からケアの方略を探れるように企画し、年2回実施した。

(1) 第1回

テーマ「急性期から高齢者のフレイルを予防する」

【日 時】令和元年6月11日(火) 18:45~20:40

【場 所】看護学部棟2階 C209

【参加者】14名

今年度1回目のケア検討会は、高齢者のフレイルについて意見交換を行った。導入として、フレイルの概念・サルコペニアの概念について講義形式で伝えて共通認識を持ったあとに、3つのグループに分かれてディスカッションを行った。ディスカッションのテーマは、次の3つであった。

- ①入院中にどんな状態・症状があると離床が遅れるのか
- ②入院中、離床を促進する看護ケアにはどのようなものがあるか、離床を妨げていることは何か
- ③入院した時点で、どんな高齢者がフレイル状態だった可能性を考えるか

①では発熱や痛みがある状態、術後など治療によって離床が遅れ、フレイルが進むという意見が出た。そこから②では、できるだけ早期にチューブ類を外し、ご本人が主導権をもって動けるように促すようにする、認知症の人には生活リズムを整える働きかけをする、などの意見が出された。③では、入院前に元々どのような生活をしていたのかの情報を得て、本来のレベルを落とさないように働きかける必要があるという意見があった。①~③を通して、病棟看護師の視点から活発な意見があった。

ディスカッションの後に、病院ではなく地域でのフレイルに関する取り組みや、自身でできる簡単なチェック方法の紹介を行った。

参加者からは、フレイル、サルコペニアについて明確な認識がなかったので学べる良い機会になった、入院中だけでなく入院前後の状態を知ろうとすることが大切だと分かった、病院から地域につなげる役割を自覚した、他に人の意見も聞けて勉強になった、とたくさん感想を頂いた。

(2) 第2回

テーマ：「高齢者の満足のいく治療と最期を見据えた人生会議（ACP）」

【日 時】令和元年11月12日(火) 18:30~20:40

【場 所】看護学部棟2階 C209

【参加者】9名

今年度2回目のケア検討会は、高齢者のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）について意見交換を行った。

導入として「ACPとは」「ACPの種類とプロセス」「家族の代理意思決定」について講義形式で共通認識を持ち、その後2グループに分かれて自由形式でディスカッションを行った。

ディスカッションの中では、ACPについて医療者自身が知らないことも多い、ACPはいつ・誰が行うのか、ACPの重要性は理解できるが、病棟・外来の多忙な状況下でACPをどのよう

に導入したらよいのか、といった意見が出された。話し合いのなかでは、病状が悪くなってからではなく、入院時や退院時も含めて看護師が経時的に関わること、多職種と連携しながら、チームで介入していくことの重要性を共有した。そして、医療者として死に対する本人や家族の思いを受け止め、治療・ケアの意向についての希望を聞く技術が求められるとともに、それにかかる時間・人・場所などコスト面への工夫など、身近なところから取り組めることを話し合った。臨床現場で ACP を浸透するためには制度化してはどうか、各職種が ACP に対する意識を持つことは必要だと思う、まずは対象者と関わりが多い病棟看護師が ACP のきっかけをつくることで、病棟や多職種にも広がるのではないかと、という意見も出た。また、退院調整看護師の実践事例を通して、家族への代理意思決定支援について学んだ。

参加者からは、「新しい知識が増えた」「難しいテーマだったが、今後きっちり考えていかなければならないので、意識していきたい」「知識を広げていきたい」などの感想を頂いた。

老人看護学領域では、今後も年に 2 回、様々なテーマでケア検討会を開催し、多くの方にご出席いただき、活発にディスカッションを行い、高齢者の理解を深め、ケアの振り返りや方略を探っていききたい。



<急性期看護学領域>

1) 社会貢献活動について

(1) ケア検討会（看護相談室）

急性期看護学領域では、臨床現場で実践している看護師とともに、重症患者や家族へのケアの質的向上を図ることを目的として、「クリティカルケア看護学ケア検討会」と称して事例検討会を開催している。今年度は通年テーマを「見通す力」とし、2回のケア検討会を開催した。

第1回目は、以前より勧められていた治療を希望せず院内急変してICUに入室した患者が、浅鎮静下で再度医師より治療の必要性について説明を受けた場面について検討した。治療をすれば生命予後としては十分に日常生活を送ることができる判断される状態にも関わらず、本人が治療を希望しない背景や今後について、また、その状況が患者、医師、看護師などそれぞれの立場によってどのように見えるのかを参加者とともに考えた。参加者は15名であった。

第2回目は、他院の医療者の対応に不信感を抱いた家族が、専門医の手術を希望して夜間救急外来を受診したが、翌日の専門医の診察では手術適応外であり、手術を選択しても執刀医の指名はできない旨が家族に説明され、家族の意向と治療方針が異なる場面について検討した。家族はなぜ手術を強く希望しているのか、患者の意思や患者と家族との関係性はどうか、家族の置かれた状況や看護師の置かれた状況はどうか、本当に手術が待てる病状だったのか、違和感やギャップを感じる部分はどこかなど、いろいろな視点から参加者とともに考えた。参加者は14名であった。

(2) リカレント教育

① 「急性・重症患者看護専門看護師に求められるコーディネーション機能」

川崎医科大学総合医療センターの急性・重症患者看護専門看護師である伊藤真理先生をお招きし、「急性・重症患者看護専門看護師に求められるコーディネーション機能」と題して特別講義を開催した。まずは、伊藤先生から専門看護師の役割機能についての捉え方、クリティカルケア領域ならではのコーディネーションの特徴について講義いただいた。その後、事例をもとに、患者さんの治療や苦痛緩和が上手く展開していかない理由は何か、そこにどのような現象が生じているのかを個人ワークで考えた。その後、参加者それぞれの視点を共有し、情報を整理しながら、問題の本質は何かを探索するワークを全員で行った。伊藤先生の見解を伺い新たな視点を得ながら、情報の解釈・統合を行い、次に、コーディネーションの方向性について、誰に働きかけるのか、どのように働きかけるのか、優先度はどうかという視点をもって個人ワークを行った。各自が提案する内容の妥当性を確かめるために、模擬倫理カンファレンスを開き、コーディネーションの方向性を全員で確認した。参加者は10名であった。

② 「集中治療における早期リハビリテーション～早期リハビリテーションの実際と成果、多職種で取り組むために～」

高知赤十字病院からICU専属理学療法士である遠山真吾先生をお招きし、「集中治療における早期リハビリテーション～早期リハビリテーションの実際と成果、多職種で取り組むために～」と題して特別講義を開催した。ICUでの治療環境下にある患者の早期リハビリテーションに取り組む意義や効果を、公表されているガイドラインや詳細なデータをもとに実際の事例を用いて講義いただいた。その後、遠山先生がICU専従理学療法士として考えていることや看護師に期待することについて提示し、大学院生や修了生、聴講の看護師とともに意見交換を行った。参加者は12名であった。

(3) 高知医療センターとの包括的連携事業

①5Bフロアの新人看護師のシミュレーション学習会支援

5Bフロアでは、新人看護師を対象としたシミュレーション教育を2回実施した。第1回は新人看護師が大腸切除術後患者の縫合不全の観察、アセスメント、報告ができることを目的とし、実施した。事前に病棟科長との打ち合わせを行い、今年度の新人看護師の傾向から、事前課題を課し、それに基づき、シミュレーションを行った。参加者は9名であった。第2回は新人看護師が腓骨尾部切除術後の縫合不全の観察、アセスメント、報告ができることを目的とし、実施した。第1回、第2回ともに模擬患者に対して新人看護師が実際に観察を行い、それを指導者に報告する、指導者・教員からのフィードバックを行うという形で進めた。第1回では事前課題に基づき、課題の振り返りも行いながら事例や報告の仕方についての理解を深めた。第2回では病棟管理者と相談し、第1回に比較して難易度の高い症例の設定とし、新人の成長の実感の機会とした。2回のシミュレーション教育を通して、新人看護師、指導者、病棟管理者ともには1年間での成長を実感できたという感想であった。

②7Bフロアのシミュレーションを活用したリーダー育成

7Bフロアでは、パートナーシップ・ナースィング・システムでチーフリーダーを担う時の判断や行動について学ぶシミュレーションを実施した。チーフリーダーとして急変時にどのように対応するとよいか、活発な意見交換、学びの場となった。当初、参加者はテストのようだという印象を持っていたが、会を進めるうちに発言回数も増え、チーフリーダーとしての動きを、イメージすることができ、病棟管理者も含めて今後どのように急変時にリーダーとして役割を果たしていけばよいかを考える機会となった。

③HCUフロア

HCUフロアの病棟管理者、本事業担当者と詳細に打合せを行いながら、認知症高齢者への看護に対する知識の獲得のために研修会を開催し、その後、事例検討会を2回開催した。

知識の獲得としては、「認知症高齢者の理解に基づく急性期看護ケアの実践」について神戸女子大学の藤田冬子先生をお招きし、講演していただいた。研修会に先立ち、病棟での対応や、HCUでの認知症への取り組みについてコンサルテーションを藤田冬子先生に行っていた。講義では、藤田冬子先生の老人看護専門看護師としての実践も踏まえながら、日々の看護で実際に活用できるケアについて学ぶことができた。平日にも関わらず参加者は31名であり、認知症患者への看護の関心の高さが感じられた。今後、BPSDの点数化にとどまらず、患者理解を深め介入できるよう事例検討を継続する。第1回的事例検討会では痛みの訴え、評価について事例検討する中で自分たちのケアの課題を明確化することができ、その後の日々の看護をどうするとよいか、具体的に考えることができた。第2回的事例検討会では家族から情報収集を意図的に行うことによって認知症患者の情緒面の改善をとらえることができ、自分たちのケアの効果を実感できた。2回的事例検討会を通して認知症患者の痛みに対する看護、家族を巻き込んだ看護について、自分たちの看護の可視化と、さらには看護師の成長を実感することができた。第1回事例検討会の参加者は13名、第2回事例検討会の参加者は7名であった。

2) 研究活動について

急性期看護学領域では、それぞれの教員が科学研究費の助成を受け研究活動に取り組んでいる。平成28年度から4年間の計画で「家族の体験を基盤としたクリティカルケアにおける悲嘆ケアガイドラインの開発」(研究代表者：大川宣容)、平成29年度から3年間の計画で「地方都市で

のクリティカルケア看護熟達者の発展的相互学習システムの構築」(研究代表者：井上正隆)、平成 29 年度から 4 年間の計画で「トランジションを基盤とした ICU 新人看護師の看護実践能力向上支援プログラムの開発」(研究代表者：田中雅美)、平成 30 年度から 3 年間の計画で「消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー支援プログラムの開発」(研究代表者：森本紗磨美)の研究に取り組んでいる。研究成果は、「救急外来看護師が行う悲嘆ケアの実態調査～自由記述内容のテキストマイニングによる分析」(大川宣容・井上正隆・田中雅美・森本紗磨美・岡林志穂・西塔依久美、第 15 回日本クリティカルケア看護学会学術集会)、「ICU 新人看護師の transition」(田中雅美、第 39 回日本看護科学学会学術集会)、「消化器がん患者の周術期ヘルスリテラシー」(森本紗磨美・大川宣容・畑山峰・田中雅美・井上正隆、第 34 回日本がん看護学会学術集会)にて公表している。

大学院修了生の学会発表支援を行い、第 15 回日本クリティカルケア看護学会にて修了生 2 名が発表を行った。また、大学院生の修士論文としては「集中治療室看護師のせん妄ケアにおける臨床判断」、「配置転換した救急看護師の成長」、「緊急で人工呼吸器を装着した患者のセルフケア」、学部生の看護研究としては「ICU 入室予定患者に対するバーチャルリアリティ技術を用いた支援方法の開発」について取り組んだ。

3) その他

急性期看護学領域では、令和元年度にクリティカルケア看護学領域 CNS コース 3 名の大学院修了生を輩出した。